

## 平成 27 年度第 1 回花巻市教育振興審議会

### 1 会長、副会長選出

選出について諮ったところ、永井紳逸委員から会長に原委員、副会長に在原委員を推薦する意見が出され、全会一致で了承された。

会長 原 久雄 委員（富士大学経済学部教授）

副会長 在原 眞 委員（岩手県立花巻北高等学校校長）

### 2 諮問

佐藤教育長より第 2 期花巻市教育振興基本計画について原会長あて諮問した。

### 3 議題及び報告事項

第 2 期花巻市教育振興計画について

諮問の趣旨について事務局より説明。原会長の進行により、教育について日頃感じていることや今後望むことなど自由に意見交換を行った。

永井委員 学習定着度状況調査について、平成 26 年度の 56%という数値は、平成 19 年度・平成 23 年度と比較し、かなり下がっているが、昨年度は何か特別な原因があったのか。

佐藤教育長 国や県で、小中学生を対象とし、学習の基礎基本の定着度の調査を実施している。質問があったのは中学校の数値であるが、数年間の推移の中で、通過率として良好であるのは 75%以上であり、56%という数値は非常に残念である。例えば、数学でのつまづきが比較的大きい。正答の状況をみると、以前までは理解が定着している児童生徒と不十分な児童生徒の差が大きかったが、今は定着度の分布が広がり、理解が定着している上位の児童生徒が少なく、下位の児童生徒が多くなっている。基礎基本についての習熟や反復、個別の指導が足りないという状況である。調査を実施する年度の児童生徒の状況が違うので、毎年の積み上げたものとは高低差はあるが、56%という数値は芳しくない。学校と一緒に取り組まなければならないと考えている。また、家庭学習にも派生するのではないかと分析している。

市村部長 特に、中学校の数学が課題ということもあり、今まで小学校で行ってきた授業サポーターについて、今年度新たな事業として中学校にも 3 名、数学の授業サポーターを配置し、複数での指導体制をとっている。特に、分母の大きい学校の底上げによる効果を目指し、全体的にレベルを上げていこうという新たな取組みである。

菊池委員 関連して、この実績の数値は、学習定着度調査のすべての教科の平均であると理解してよいか。

事務局 よい。

菊池委員 すべての教科の平均であれば、県レベルで平均以上の教科もあれば、落ち込みが大きい教科もある中で全体を比較するわけなので、いいものも悪いものも見えなくなってしまう。また、毎年テスト内容の難易度によって平均が変わるので、単にテスト結果の平均が良かった悪かったでは比較にならない。例えば、県の平均値あるいは中央値に対してどれくらい迫ったかというような比較をしないと、検証の数値としては妥当性が確かではないのではないか。

市村部長 菊池委員のお話のとおりである。表では単純に一つの数値を掲げているが、総合計画の中で行っている行政評価という手法では、成果指標について各担当セッションが、教科ごとの数値はどうか、あるいは県の平均に対してはどうかということから、特に課題となっている教科は何かを分析して対応することになっている。そういう意味では、この数値は単に総括した一つの数値だけが示されており、それが何故かという部分は、こうやって説明しないと出てこないことなので、成果指標の達成状況について説明する際には、要因分析も含めた形で示さないと誤解が生じることもあると思うので、配慮していきたい。

木村委員 20代～30代は創造性豊かであり、若くてエネルギーがある。いつも思うが、就職してこれから勉強していくという方が非常に多い。大学を出ても、即戦力になる方があまりいない気がする。小学校や中学校等の教育で、働く意欲を沸かせるような、働くことに対してもう少し積極的になるような教育方針であればいいと思う。外国では20歳になるとすぐ働いて即戦力になる。特に今はITも発展しているので、そういった方面を育てられればと思う。少子化や地方消滅と言われている中で、花巻市として特色を持った教育をしていったほうがいい。

原委員 就業意欲という話が出たが、少子化になってますます少なくなった若者の働く意欲が乏しいのは大変である。

市村部長 いわゆるキャリア教育の話があったが、小中高それぞれの発達段階に応じて、例えば小学校や中学校では職場体験を実施している。各市町村で地方創生のビジョンを作る取り組みの中で、キャリア教育の部分をどのように進め、地元への若者の定着をつなげるかを市で取り組んでいるところである。地元に戻って働く、県外の大学に進学しても地元に戻って就職するために、地方でも給料は安いかもしれないがこういう生活ができるということ、発達段階に応じて何らかの形で子どもたちに教え、考えを持ってもらわないと戻って来られない。

また、市の教育委員会として悩ましいのは、高校教育にどこまで関わられるかということである。市内の高校からのご協力をいただきながらということになる。校長先生を中心に、高校でもキャリア教育が重要だという認識は十分していると思う。共同で将来の若者の定

着に結び付けていくことが、人口減少対策としても大きな課題だと認識し、検討している最中である。

在原委員 高校としてのキャリア教育の現状であるが、青雲高校を中心に市内の企業に就業体験を行っており、その中で仕事に対する興味関心や課題等を見つけ、将来の自分自身の仕事の選択に役立てていくことを各学校で行っている。授業でも、意欲的・主体的に自分自身で物事を考える思考力・判断力・形成力が、文部科学省で求められている。そのために、授業改善としてアクティブラーニングという方法がさかんに取り入れられている。これは、問題解決型学習と言われ、課題を設定し、調査・研究を教員と生徒が行いながら、課題についての成果等を自分自身で意欲的にまとめて解決していき、それによって学習意欲を引き出すという方向性が出されている。従来型の高校は、教師の一方向的なコミュニケーションが中心であり、それに対して生徒は受動的に知識として受け入れている体制だったが、これからの時代はそうではなく、自分自身でいろいろな問題を見つけ出し、主体的に取り組みながら学んでいく姿勢が、将来の仕事の解決に役立つであろうということで、授業改善等を含めながら、キャリア教育に取り組んでいるところである。

原委員 高校でも大変な苦労があると思う。大学でも、4年前から就業意欲を掻き立てる授業が必修になり、富士大学ではその一年前から先行して取組んでいる。富士大学にはキャリアセンターがあり、全学年の生徒を必修とし、ベテランの教授が教えている。インターンシップは、2年生全員が行っている。花巻・北上の企業や行政機関に依頼し、約1週間限定ではあるが、非常に意欲がわくようだ。

ニートというのはイギリスから生まれた言葉で、あつという間にヨーロッパ・アメリカ・日本の先進国に広がった。ニートとは、**Not in Education, Employment or Training**の略であるが、働くのが嫌・教育も嫌・訓練も嫌というなんでも嫌という意味であり、ニートの若者が増えているのは大変なこと。フリーターというのは、自分のやりたいことしかやらない人のこと。国でも大学でも、ニートやフリーターが増えると大変であると捉え、就業意欲を持たせるようにとキャリア教育が必修化された。国を挙げて、取組んでいる状況である。就業意欲は非常に大事であると捉えている。

柳原委員 私立の保育園であるが、周辺高校生のインターンシップの受入れをしている保育園である。夏休みも3日間のインターンシップ希望の高校生を受入れ、保育士業務を体験してもらう予定。希望があれば受入れをしている状況である。

三井委員 福祉の現場であるが、福祉や介護の職員が不足している現状。学生に話を聞いてみると、中学生の時等にふれあい体験をしたことや福祉施設や保育園を訪問したという経験が一つのきっかけとなって福祉の道を目指した学生がけっこういる。そういう意味でも、学校の教育の中でもっと力を入れてもらえればありがたい。3Kや5Kと言われ、悪いイメージが先行してしまっている部分もあるので、現場を知ってもらう、訪問してもらう、ふれあいをしてもらうのが役に立つのではないかと。福祉の現場はそれぞれの地域にあり、地域定着にかなり貢献できる職種ではないかと思う。

原委員 インターンシップというのは、受け入れていただく企業のご協力があって初めて成り立つ。ご協力いただいて本当にありがたい。

照井委員 社会が成熟していく過程だとは思いますが、だいぶ前に森から子どもの声が消え、体力的な部分が劣ってきたのと同じように、街から子どもの姿が消えたのではないかと思う。これは、学童に通っている児童がかなり多いことが要因。多くの児童が学校が終わっても家庭に帰らず、学校で過ごすことになる。もし、そういう児童が家庭に帰っていたら街に姿があるのではと思う。教育環境の中での夢と同じように、社会環境の中での願いがある。これは、実際に子どもが活動して見えてくるものではないかと思う。例えば、学童で、今月は4年生が街に出よう、来月は5年生が街に出ようというように、子どもが地域に出て、こんなものがあるという発見や、こんなことをやってみたいというような目的が見つけれられるかもしれない。これをやるためには予算化が必要になってくるかもしれないが、少なくとも子どもの姿が街から消えている、街中に人がいないというのは、次の世代を考えると、この街は将来的にダメになっていくのではないかと感じてしまう。教育環境の中での夢と同じように、社会環境の中での子どもの実体験から見えてくる夢や目的があるのではないかと思う。資料には、行政・学校・地域・家庭とあるが、この中に学童が入らなくてもいいのかと感ずるくらい社会構造が変化していると思う。改めて、小さい頃から地域に出て、いろいろな体験をしていく間に、大きくなったらこういうことをやってみたいという即戦力につながるような子どもたちの芽を、我々が出させてあげられていないのではないかと思う。大学の先生から聞いた話だが、〇年生になったからこれを教えるというのではなく、学生が1年生に入った時から、即戦力になるようにいろいろな授業をするそうだ。全般を見ながら、次の世代を担う小さい子どもに対し、どのように花巻に目を向けてもらうかが大事ではないか。もし街を見ないで育ててしまい、大きくなってから花巻のことを何も知らないということになっては困る。街中に子どもがいれば、おじいちゃんおばあちゃんも出てくることができると思う。家族みんなで花巻の郷里に関心を持ってもらえるような、学校教育を主体にプラスした社会教育もあればいいと思う。

坂本委員 花巻学童クラブには、若葉小学校の児童が通っている。花巻市内の小学生のうち、900名ほどが学童クラブに通っている状況。学校が終わって学童に行き、18時頃に家に帰るとご飯を食べてお風呂に入って寝るといったような生活が、学童に通っている子どもたちの生活である。

花巻バージョンのたらしらという歌があるが、これは、花巻のいろいろな場所が歌の中に出てくる。1番には身照寺やぎんどろ公園が出てきて、2番にはパリパリパークや銀河橋や水車小屋、割り箸で食べるソフトクリームが出てくる。子どもたちは、歌えるがそれがどこにあるかを知らなかった。花巻学童クラブでは、2年生以上の児童を対象とし、たらしらツアーを計画している。バスに乗って末広町で降りて、吹張町まで行き、ぱりぱりパークのところを歩いて、銀河橋や水車小屋を実際に見て、まなび学園は赤ちゃんが来たり高齢者が勉強したりするところというのを教え、それからマルカンまで歩いてソフトクリームを割り箸で食べ、賢治の広場を見て帰ってくるというツアーである。こういうことをしないと、花巻に住んでいても上町はお祭り広場としか子どもたちは分からない。大人がきっかけを作らないと、子どもたちは分からないままである。車社会なので、家庭で出かける時は、駐車場が完備されたところへ買い物へ行ったり遊びに行ったりするだけ。どこかで仕掛けを作らないといけないことは感じている。

小野寺委員 保育園に子どもを通わせている身として、子どもにどんな教育を受けさせたいか、どんな教育をしたいかを最近とても考える。この先学校に進んだ時に、すべて学校という項目に教育を押し付けるのではなく、家庭でできることは家庭で十分にやっつけていかなければならないと思う。今までの振興計画の中にも、家庭での教育の充実化について盛り込まれているが、平成 19 年～平成 27 年というのは、家庭の中での変化が顕著だったのではないと思う。保護者も仕事の部分で、時代が忙しくなってきた、子どもと向き合う時間が無くなってきているということを考えると、子どもと向き合っただけで家庭での教育を充実させるという時間が減ってきているのではないかと感じている。ただ、家庭での教育をしっかりやっつけていかないと、どんなことにも柔軟に対応できる子どもが育たず、将来的に就業意欲がなくなったり、仕事をしていってもなかなか自分で物事を考えられない大人になったりするのではないかと。ぜひ、10 年間の家庭環境の変化に沿った新たな家庭教育の充実化を盛り込んでいただきたい。

また、花巻に住んでいて自然との付き合い方や花巻の施設を知らないという点について、すべてを学校や学童に任せるのではなく、家庭の中で一緒に自然に触れてみたり花巻の施設に触れてみたりすることがとても大事だと思う。この場での発言が適切か分からないが、去年は痛ましい川での事故があった。そういったところを懸念して自然との距離をあけてしまうと、せっかくの花巻のいいところで育つということがなくなってしまふ。例えば、私が小さい頃は祖父や父に川や山に連れて行ってもらい、時には危ないこともあったが、そうやって覚えたことがたくさんある。ぜひとも、自然との付き合い方というのも充実化した教育を盛り込んでいただきたい。時にはそれが、危機回避能力につながり、必ず人格をつくり豊かな子どもに育つと思う。そういった教育方針に沿って、私たちも家庭での教育を充実できればいいと思う。

皆川委員 就学上、支援が必要な子どもに多く携わる機会があるが、実際お子さんの障がいについての親御さんの悩みは決して減ってはおらず、むしろ出現が高くなっている現実がある。学校の中で、そういった教育相談を受ける際、入級や支援学校への進学を支援する方向で話を進めていくが、その先に出てくるのが出口の問題である。資料にも特別支援教育と学校適応指導の充実という項目はあるが、これは小中学校のことであり、その先についてはどうしたら良いか、もっと先を言えば、支援が必要な子どもが大人になった時にどうやって独り立ちをしていくかという部分が見えにくく、親御さんが一番悩んでいる部分だと思う。できれば通常学級に入り、中学校高校に進んだ時に、その方向を思いっきり曲げる授業を学校としてはしなければならない。では、その先はどうなるかといった時に、地元で働くことができるだろうかということが目の前に出てくる。振興計画では限界がある部分もあるが、立案する際には先の部分を視野に入れていただきたい。現実的に、中学校からその先に行く時に、高等支援はどうなっているかという話になった時、花巻では無理だということで盛岡まで通うことがある。ぜひ、支援学級の子どもたちがその先でも学べるように、さらに将来働けるような全体的な枠組みを検討していただければと思う。

三井委員 7 月 8 日の神戸新聞に兵庫県の教育委員会の報告で、公立小中学校の通常学級に籍を置きながら特別な支援を受けている児童生徒が 2014 年で 1,565 人、8 年間でおよそ 6 倍に急増しているというデータがあった。全国的にも同様の傾向であり、2014 年で 37,559 人。これはある意

味、理解が広がったから増えたという側面ももちろんあるが、現実的には教員の不足が明らかな課題であるという記事であった。文科省としては、少子化に対し 42,000 人の教職員の削減を考えているという記事もあった。特別な支援が必要な子どもが現実的に増えているという状況の中で、これは簡単な問題ではないが、やはり教職員の確保、また、花巻市では頑張っただけで増やしてもらっているがふれあい共育推進員等のサポートの体制を充実していただきたい。我々はどちらかという大人の方々の受入れをしているが、高校からの情報が一切なしに我々のところに来るため、受入れた後にいろんな問題が起きることがあるので、できればそういった情報が事前であればもっと違った対応ができるのではないかと思うケースもけっこうある。小学校から中学校、中学校から高校、高校から成人といったようなライフステージに応じた情報がしっかり伝わっていくようなシステムが必要なのではないか。

高橋委員

今、学校というと滝沢の件や矢巾の件が浮かび、生徒の登校拒否やいじめ等、花巻には同じようなことがなければいいと思うのが地域住民の考えである。不登校児童生徒の出現率のパーセンテージを見ていて、実績もそんなに多くはないと感じたが、こういった小さなところが家庭の中でいろいろな課題があって数字に表れているのではないかと思う。これは、一般市民には見えない部分であり、どう解決していけば良いか考えるところである。

また、学校を時々見て回ることがあるが、子どもたちが校庭で遊んでいない。中学校だと放課後は部活動でさかんに校庭を使っているようだが、子どもたちが昔のように校庭を使って遊んでいるという光景が少なくなって、下校になるとそれぞれどこかへ消えてしまう。学校に行くと、先生方はパソコンに向かって仕事をしているし、児童生徒は昔のような遊びを知らないと言えいいのか、校庭で遊んでいたとしてもゲームのようなものしかやっていないのが気になる。もっと元気に遊んでほしいと思いながらいつも眺めている。子どもたちが朝早くや放課後に元気に遊ぶ姿があちこちに見えてほしいと思う。大人についても、スポーツや文化、生涯学習に対して、花巻の方々は少々消極的な気がするので、もっともっと積極的になってほしい。近隣市町を見ると、地域の文化について一生懸命取り組んでいる姿が見られる。花巻でも一部では取り組んでいるようだが、なかなか盛り上がっていかない気がするので、もっともっと盛り上がってほしい。

多田委員

3 月まで小学校に勤めていた。総合的な学習の時間にまち探検をしたが、街の方々に元気が出たと言っただけで、双方にとってとてもいい学習になったと思う。現在もいろいろ工夫しながら、学校でできること、学童クラブや家庭、子ども会あるいは地域の中でできることを仕組んでいきたい。

学習定着度調査の数値目標についての話があったが、県の調査も小学校だと 4 年生と 5 年生が対象だったものが 5 年生だけになったり、国語と算数だけだったのが 3 教科になったり、結果を踏まえて変化が起きている。目標値を定めるということについて、非常に吟味をしなければいけないと思う。子どもたちも教職員も努力した結果が伸びにつながっていけばいい。

また、普段私が思っているのは、キャリア教育と関わって、あいさつや言葉遣いが非常に大切だということ。あいさつというのは、一生大切にしたいことだと思う。家庭の中でも学校でも地域でも、あいさつ一つで元気になる。仕事に就いた時にも非常に大切である。

最後に、なんとかしてかけがえのない児童生徒の命を守るということで、自己肯定感を高め

たい。大人も子ども、人を認め、褒め、困った時には SOS を発信し、それに共感し、すぐには前向きにならないかもしれないが、自分のことを好きであってほしいと願う。

教育長

たくさんのご意見をいただいて、もっともだと思って聞いていた。就業意欲の話から始まって、インターンシップの件、キャリア教育の件、様々な話が出た。

今年の 4 月から新しい子ども子育て新制度をスタートさせるにあたり、平成 25 年度に保育園・幼稚園に入園している園児の保護者を対象としたアンケートを実施した。小学生の兄弟がいる保護者も多くいる。まだ分析は不十分であるが、子どもの子育ちの環境と親の子育ての環境ということで見えてくる部分がある。例えば、小学校に入って子どもたちがどのような放課後を過ごしているか。学童クラブやスポーツ少年団に通っている児童もいるが、大半は家に帰っている。親御さんの仕事はほとんどが共働きで、祖父母と暮らしている家庭も少ない。子どもたちは家でじっと過ごしていることがほとんどである。本来であれば外で遊んだり、学校に残って勉強したり、いろんな活動をしたりするが、そういうことがなく、実際は子どもたちの体験が少ない。その裏返しとして、親御さんたちが心配しているのは、勉強やしつけであり、親御さんも悩みながら、もっと子どもと遊ぶ時間を作りたい、しつけの時間を確保したい、家族そろってこんなことをしたいという思いで悶々としている。中学校に入ると、一斉に部活動が始まり、運動能力がある子もない子も運動する機会ができる。部活動は大きい壁だと思うが、花巻は意外と部活動が盛んであり、一斉に運動能力が上がる。小学校で運動能力テストをすると、走ることを基本に、特に男子の運動能力が下がっている。ところが、中学校に行くと一斉に運動能力が上がる。友達関係を作ったり、体を鍛えたり、これが部活動の効用である。しかし、部活動を頑張り過ぎて家庭学習ができない等、自分のゆとりの時間、自分を見つめなおす時間が取れない。ある意味では、自分とは何だろうということや自己肯定感について、ゆっくり考えたり話し合ったりする場が持てないのは大きな課題であると感じている。例えば、自分は一生懸命働きたい、こういう仕事を頑張ってみたい、こういうコースをやってみたいという時に、それはいいと思う、これはいいところだと思う、その能力を発揮したほうがいいのかというような周りからの支えがないといけない。それでも、親御さんの時間がない場合はどうしたらいいか。例えば、国で行っているコミュニティースクール事業や学校支援地域本部事業がある。地域のことを知らない、生活体験が乏しい、地域の歴史を知らない、友達とのコミュニケーション能力が弱いということであれば、総がかりで子どもたちを見ていかなければならない。しかし、地域が漫然として以前のままの地域の状況であれば、子どもは育たない。それでも地域が忙しい場合はどうしたらいいかという、例えば土曜日授業がある。子どもたちは土曜日が休みなので、NPO や地域で様々な体験をさせようというところから始まった。特に、都市部では、使わなくなった学校施設や公民館、コミュニティーセンターを利用して新しい社会教育を始めた。いつの間にか土曜日授業が勉強のほうに変わってしまった。子どもたちが学ぶということになれば、これから少子化の中で、場合によっては統合や再編の可能性が出てくるかもしれない。また、単独の地域で子ども会活動ができなくなるかもしれない。親御さんたちの発想で豊かな体験をさせるためにはどうしたらいいかを考えていかなければならないし、そういうことを協議する場を提供していかなければならない。つまり、今度の教育振興基本計画では、全部を一体化して、新しい現在の実態を直視し、それぞれの地域の状況を把握しながら、いろいろな手を講じていく必要がある。学校支援地域本部事業、コミュニティースクール事業につ

いては、今のところまだ動いていないが、やってみたいという学校も出てきている。何より花巻で強みなのは、教振活動が非常に昔から行われているということ。それから、もうすぐ夏休みがあるが、いろいろな体験をするにも花巻市には博物館やその他類似施設がたくさんあること。これらの施設ではたくさんの体験事業が開かれており、7月15日の広報に掲載されている。その事業の中から、家庭で自主的に選択する、こども会で選択する等してほしい。子どもが遊ぶために、親や先生方、地域も遊んで、実践活動をどんどん積み重ねることが大事であると思う。

スポーツ関係については、花巻はいい方向に行っていると思う。大きなイベントもスポーツ施設もたくさんあり、ほとんどが満配の状態である。

畠山委員 運動部に入っているお子さん方はクラブ活動で運動する機会があるが、クラブ活動をしていない小中高の児童生徒について体力をつけるために、体育施設を開放できる場合、広報に前もって掲載する等して、サッカーやバスケットボール等何かできることを体育協会として考えていかなければならないと感じた。これから帰って、体育協会で話し合いたいと思う。ただ、施設の予約状況がほとんど満配であるため、年間スケジュールを確認して間を見ながら、指導者もお願いして取り組めば、健康なお子さん方が育つのではないかと思う。

坂本委員 神楽鑑賞を趣味にしている友人がいる。様々な団体の演舞日程が一覧表になっているものがあるといいと言っていた。そして、それがネットで見られると、全国からも鑑賞に来ると思う。郷土芸能の発展に役立つのではないか。

岩間教育企画課長 承りました。

菅原委員 小学校と中学校の子どもがおり、子育て真っ最中でいろいろ心配な面もあったが、今日話を聞いて、計画の中に様々なことが盛り込まれていることを知ることができ、安心した部分がある。ぜひ、実現してほしい。

永井委員 教育長から就学前の教育について話があったが、賛成である。私は学童に関わっているが、保護者の生活を見ると、共働きで親子のふれあいが少なく、そのため、注意をしても言うことを聞かないような、基本的生活ができない子が多い。学校の先生方も大変なのだろうと感じる。家庭でどう教えていくかというのが大事で、時代の流れだろうが、預けられた保育園や学校だけではどうにもならない。親御さんに情報を与えていかなければならない。低学年対策についてきちんとやってほしい。教振でも低学年向けのリーフレットを作成しているので、活用していただきたい。

その他 なし（15時40分 閉会）